



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am（「朝の祈り」に続いて）
日曜日 7:00am、8:30am、9:30am



待つ人と待たせる人

主任司祭 小西 広志 神父

待降節^{たいこうせつ}というのは、イエスさまの到来^{とうらい}を「待つ」時です。ですから、待降節の間は「待つ」ことについてあれこれと考えを巡^{めぐ}らせてみたらいかがでしょうか。

「待つ」という行為^{こうい}は二つのことから、あるいは二人の人がいなければ存在^{そんざい}しません。つまり、「待たせる人」と「待つ人」の関係が必要なのです。

「待つ人」の気持ちに対しては、比較^{ひかくてき}的、わたしたちは寄り添^よいやすいかもしれません。「何時間でも待てるわ」と仰^{おつ}しゃる方もいます。しかし、待つ時間の大切さに本当に気がついていのでしょうか。

ましてや、携帯電話^{ふきゆう}などが普及^{むずか}した現代社会^{むずか}にあっては「待つ」ことが難しくなりました。「何時間でも待てるわ」と言っても、相手に携帯電話から連絡が可能となりました。これでは「待つ」になりません。

「待つ」時は、相手のことを思いやる時なのだと思います。わたしたちは辛抱強^{しんぼうづよ}く、連絡もつかない相手を「待ち続ける」ことができなくなりました。その分、相手との深い関わり合いも失われつつあるのではないのでしょうか。

旧約聖書と新約聖書、聖書全体^{つらぬ}を貫^{しそ}いている思想は「待つ」です。

聖書の始まりに楽園追放^{つひほう}の物語があります。罪を犯した人間は神さまから罰を受けますが、同時に墮落^{だらく}した人類の救いについての最初の約束もそこにはあります（創3章16節参照）。この箇所は原福音とも呼ばれています。このおかげで聖書全体は「待つ」ところに彩^{いろど}られています。楽園の門は閉じられても、いつか再び開け放たれる日が来ると信じるのです（3章24節参照）。それが救いです。「やがて来られる方」によって人類はいのちを回復^{かいふく}するのです。「ついにシロが来て、諸国の民は彼に従^{たみ}う」（49章10節 新共同訳）という神のみ言葉に支えられて人は「待つ」のです。

聖書の終わりにも「待つ」があります。「アーメン。主イエスよ、来てください」（黙22章20節）。「来てください」はアラム語で「マラナ・タ」と言います。再び主イエス・キリストが来られる日を待ち望みながら人は生きていくのです。

「来てください」（マラナ・タ）は、ちょっとアクセントを変えて読むと「主はすでに来ておられる」（マラン・アタ）となるそうです。この世界に主はすでに来ておられます。しかし、まだ、完全には来ておられません。その日まで、わたしたちキリスト信者は「主の死を告げ知らせ、復活をたたえる」のです。

ところで、「待たせる人」と「待つ人^{あいだから}」の間柄にある人間関係ですが、実は「待たせる人」の気持ちがかつと重要になるかもしれません。その人はどんな思いで相手を待たせているのでしょうか。

約束の時間^{いそ}に急ぐ人の気持ちに思いを馳^はせて見たらよいでしょう。

日本の文学者で「待つ」についての深い洞察^{どうさつ}をしているのは太宰治^{だざいおさむ}です。短編『走れメロス』は「待たせる人」の立場からの作品です。さらに戦時中に発表された短編『待つ』では「いったい、私は、誰を待っているのだろう」と主人公が感嘆^{かんたん}します。太宰は「待つ」ことに伴う不安と恍惚^{ともな}を見出していたのでしょうか。『走れメロス』の主人公メロスは「待たせる人」です。この作品には「待たせる人」のこころの変化^{びようしや}が描写されています。「待たせる人」メロスは相手への信頼^{しんらい}を深めていきます。おそらく太宰は、大切な人を「待たせる」体験をしたのかもしれませんが。

「待つ人」は自分こそが相手の気持ちをよく知っていると思っています。しかし、それは思い上がりであり、自分勝手なこころです。むしろ「待たせる人」の方が相手の気持ちをよく理解しよう^{つと}と努めているのではないのでしょうか。互いに相手のことを思いつつ、「待つ人」と「待たせる人」の間柄はさらに深いものとなっていくのです。

「待つ人」とはわたしたち人間。「待たせる人」とは父である神さまです。